

# 早春の草地管理

## 一、早春施肥の時期と効果

今年の冬は、雪が多かったため、土壌凍結が浅くなっています(図1)。今季は、作業が少し早まっているのではないかと思います。

牧草の萌芽期は、4月下旬となっています(表1・図2)。

気温が一〇℃前後になると、牧草の芽が動きだし、養分吸収が始まるので、この時期に肥料散布すると収量が高まります。(図2。)土壌凍結が抜けて草地にはいれるところから順に施肥作業を進めましょう。

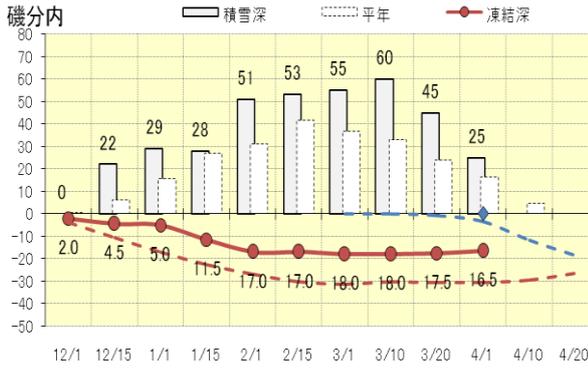


図1 今季の積雪と土壌凍結深(標茶町磯分内)

表1 融雪期と萌芽期の平年値

平年値	弟子屈町	標茶町
融雪期	4月13日	4月8日
萌芽期	4月22日	4月26日

しかし、作業が遅れ幼穂形成期頃(5月中旬以降)に散布すると肥料の効果が劣り、期待した収量の確保ができません(図3)。



図2 平均気温と牧草の生育期節

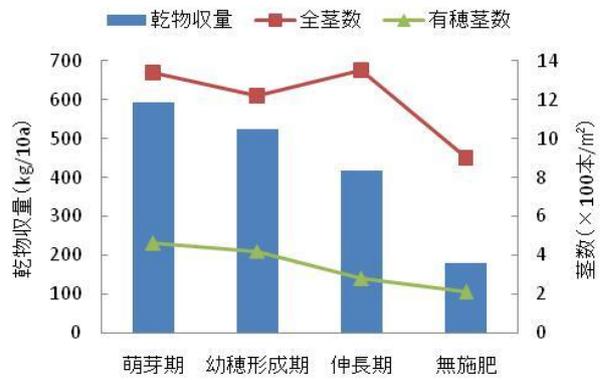


図3 早春施肥と収量、茎数の違い

## 二、1番草収穫に向けての留意点

昨年の晩秋は、気温が高く、長く伸びた枯れ草が残ってシート状に覆っている草地が多くあると思われる。

それらは牧草の生育や肥料の効果を低下させるだけでなく、サイレージ調製時に混入すると、発酵の障害となり、大きなダメージを受けることとなります。

その対策として、パスチャーロー掛けやストローチョッパー・ディスクカッターなどで刈散らすことが有効です。枯れ草の量が多い場合には、集草して草地から持ち出すのが良いでしょう。

## 三、良質なサイレージづくりのための施肥

早春にたい肥やスラリーを散布する場合は、①融雪後なるべく早い時期にまく、②散布後収穫までに五〇日以上あける、ことが肝要です。

また、たい肥やスラリーなど有機物の施用量に応じて、化成肥料の散布量を削減しましょう。

チモシーは、カリ過剰だと衰退していきま。粗飼料分析値でサイレージのタンパクとカリ含量が高い場合は、ほとんどがシバムギだと言えます。「タンパクの値が高いから大丈夫」と喜んではいけません。チモシーに比べ、STP(溶解性蛋白)が多く、分解されてVBN(アンモニア等)となり発酵に影響しているためです。

つまり、良質なサイレージをつくるには、チモシーを衰退させないための施肥管理の見直しが必要なのではないでしょうか。

また、裸地が多い草地には、追播することを検討しましょう。

但し、追播する際にディスクローローやロータリーローなどで表層攪拌すると、土壌中のギンギンの種子が光刺激を受けて発芽し、繁茂する場合がありますので注意が必要です。